



特集

建築のまちを旅する

11

弘前・ 五所川原

棟梁・堀江佐吉が
建築の近代化を担った
ハイカラな城下町



表紙の写真

〈旧弘前偕行社

(弘前厚生学院記念館)

玄関ポーチとドーマー窓

設計 | 堀江佐吉

偕行社は陸軍将校らの集会所・社交場で、国内外の師団司令部所在地に建てられた。1907（明治40）年に竣工した旧弘前偕行社もそのひとつ。当時の弘前で洋風建築の第一人者だった棟梁・堀江佐吉が設計を手がけ、息子たちが施工にあたった。屋根は瓦葺きだが、玄関ポーチだけは鉄板葺きで雪止めが付く。また、車寄せの妻飾りは唐草模様で、その中央には、弘前に設置された第八師団にちなむ「蜂」のレリーフが施されている

【写真：石田 篤】

左写真

〈旧津島家住宅

(太宰治記念館「斜陽館」)〉階段ホール

設計 | 堀江佐吉

洋風意匠の階段ホールの向こうには和風意匠の縁側が続く、和洋折衷の構成。ここは作家の太宰治が生まれ、幼年期を過ごした家だ。太宰の父である津島家6代当主の源右衛門が堀江佐吉に依頼し、1907（明治40）年に完成した。津軽地方の伝統的な町家の形式を踏襲しつつ、写真の階段ホールをはじめ1階店舗や2階応接間は洋風の意匠で、洋風小屋組も導入するなど、新しい時代の邸宅の姿をつくり上げている

【写真：石田 篤】

LIXIL eye no.23

2020年11月20日発行

発行 | 株式会社LIXIL

編集発行人 | 早川氏幸

開発営業本部

TH統括部

〒136-8535

東京都江東区大島2-1-1

Tel: 03-6837-1646

Fax: 03-6837-1662

制作 | 株式会社フリックスタジオ

デザイン | 株式会社ラボラトリーズ

印刷 | 竹田印刷株式会社

* 本記事の無断転載を禁じます

* 本文中の敬称は省略させていただきました

次号『LIXIL eye』no.24は、

2021年2月発行予定です。

『LIXIL eye』のバックナンバーは
インターネットでご覧いただけます。

<https://www.biz-lixil.com/column/lixileye/>

CONTENTS

特集

04 建築のまちを旅する | 11

弘前・五所川原

06 テーマ1

棟梁・堀江佐吉が

建築の近代化を担ったハイカラな城下町

ナビゲーター | 北原啓司

10 旧第五十九銀行本店本館(青森銀行記念館) / 旧弘前市立図書館 /

旧津島家住宅(太宰治記念館「斜陽館」) / 旧弘前偕行社(弘前厚生学院記念館)

14 テーマ2

ゆりかごから墓場まで親しまれる前川國男の建築

16 弘前・五所川原建築めぐり

22 住宅クロスレビュー | 11

寸法感覚

木村吉成 + 松本尚子「house S/shop B」× 竹原義二「101番目の家」

32 建築家の〈遺作〉 | 08

篠原一男「蓼科山地の初等幾何」

談 | 奥山信一

36 新世代・事務所訪問 | 11

モクチン企画

ナビゲーター | 門脇耕三

44 構造家の新発想 | 11

そこにある素材を使う

名和研二

48 触覚デザイン | 08

坂倉準三の手すり

ナビゲーター | 笠原一人

52 土木のランドスケープ | 11

トヤ沢砂防えん堤

ナビゲーター・文 | 八馬 智

58 TOPICS

住宅における手洗い・洗面設備の設置と利用に関する調査

文 | LIXILビジネス情報サイト事務局

60 INFORMATION

LIXIL ビジネス情報サイトのご案内 / LIXILからのご案内 /

展覧会のご案内 / LIXIL出版 書籍案内

64 紙上の建築 | 11

人生と建築

藤野高志

今年「弘前れんが倉庫美術館」がオープンした弘前は、北辺の地にありながら、明治の後半から洋風建築が増えていった先進的な建築のまちだ。そこには当代きっての建築巨匠の存在があった。ひとは明治の堀江佐吉。

開港した函館や札幌から西洋建築を独学で習得した。地元名士の洋館をいくつも手がけ、太宰治の生家「旧津島家住宅（太宰治記念館「斜陽館」）」は現存するひとつ。

また洋風の銀行、図書館は弘前の顔になった。

もうひとは昭和の前川國男。母方の縁、フランス滞在時の縁で、公共建築の名作を次々残してゆく。

この二大巨匠がいまも愛されつづけている、建築のまちを旅してみよう。

弘前 五所 川原

特集 建築のまちを旅する 11

弘前市民中央広場から「旧第五十九銀行本店本館(青森銀行記念館)」を見る。棟梁・堀江佐吉が59歳のときに手がけた洋風建築で、1904(明治37)年に竣工。外観はルネサンス調で、正面の屋根頂上には展望台を兼ねた装飾塔があり、その先端にはインドの寺院に見られるような相輪を配している。銀行建築として壁や窓を防火構造にする工夫も施している。佐吉の代表作であるこの建物は、市民らの熱望が実って取り壊しを逃れ、記念館として保存活用されるに至った。国重要文化財(写真:石田 高)

テーマ1

棟梁・堀江佐吉が建築の近代化を担ったハイカラな城下町

ナビゲーター | 北原啓司（弘前大学教育学部教授、同大学大学院地域社会研究科長）

取材・文 | 長井美暁
写真 | 石田 篤（特記以外）



堀江佐吉

ほりえ・さきち

1845（弘化2）年、弘前城下に生まれる。父は“お城大工”の伊兵衛。34歳と44歳のときの2回、出稼ぎのために北海道に渡り、開拓使関係の工事に従事。その際に函館や札幌で洋風建築を研究した。略歴は09ページ参照【写真提供：堀江組】

01 | 津軽為信

戦国時代の武将。初め南部氏に属したが、主家の内紛に乗じて独立を果たし、現在の青森県西部にあたる津軽地方を統一。藩政の基礎を固めた

青森県弘前市は前川國男の建築が多くあることで知られる。一方で、明治時代に建てられた木造の洋風建築も多く残り、城下町でありながらハイカラな雰囲気が漂う。

代表的な洋風建築のつくり手は、大工棟梁の堀江佐吉だ。腕のたつ大工の血筋をひいた佐吉は出稼ぎ先の北海道で、独学で洋風建築を会得。弘前で建築の近代化の担い手として、和洋折衷の優れた建物を次々に手がけた。佐吉はまた、五所川原にある太宰治の生家をつくった人物でもある。

弘前大学教育学部の北原啓司教授の案内で、佐吉の人生と建築をたどってみよう。

東に八甲田連峰を望み、西に津軽富士とも呼ばれる霊峰岩木山を有し、南には世界自然遺産の白神山が連なる弘前。

このまちの歴史は戦国時代の津軽氏の台頭に始まる。弘前藩祖の津軽為信⁰¹は、津軽地方を治めるために築城を計画し、選んだのが当時は高岡と呼ばれていた弘前だ。弘前城は2代藩主信枚によって1611（慶長16）年に完成。以降、城下町弘前は明治維新まで、津軽地方の政治・経済・文化の中心として栄えた。

いま、桜の名所として名高い弘前公園は、かつて弘前城があった場所だ。公園内には建築家の前川國男が設計した「弘前市民会館」「弘前市立博物館」「弘前市緑の相談所」がある。他に公園そばの「弘前市庁舎」など、弘前には前川建築が8件あり、すべて現役で使われている（関連14-15ページ）。

もうひとり、弘前の建築を語るうえで欠かせない人物がいる。“大工の神様”と謳われた堀江佐吉だ。明治期に多くの洋風建築を弘前につくり、多くの後進を育てた。

「末永く語り伝えねばならぬもの」

ナビゲーターの北原啓司弘前大学教授とは、佐吉が手がけた「旧弘前市立図書館」で待ち合わせた。弘前公園そばの追手門広場の一角にある。同じく佐吉の手になる「旧第五十九銀行本店本館（青森銀行記念館）⁰²」も歩いてすぐだ。いずれも佐吉の晩年、60歳前後のときに完成した。前者は佐吉

が仲間と建設費を出し合い、出来上がった建物を市に寄付したという物語をもつ。後者は佐吉の生涯の集大成、最高傑作といわれる。

東奥義塾⁰³の跡地である追手門広場には、現図書館や郷土文学館、体育館、観光館、山車展示館といった公共施設が集まり、「旧東奥義塾外人教師館」（関連20ページ）も保存されていて、市民も観光客も行き交う。旧図書館はもともと東奥義塾の敷地内に建てられ、昭和初期に一度移築され、1989（平成元）年、市制施行100周年記念事業により現在地に移築復原された。その後、青森銀行記念館が面する弘前市民中央広場の拡張整備事業に伴い、中央広場内に移築する計画も浮上したが、それは白紙に戻された。

北原教授は「旧弘前市立図書館は、見様見真似で上手につくられた洋風建築であること、それがこれまでにどう保存されてきたのか、という話が建築学的な評価よりも大切です」と話す。

保存といえば、青森銀行記念館にも話がある。1965（昭和40）年、青森銀行が現在の弘前支店を新築する際、建物は取り壊される予定だった。しかし、弘前商工会議所や一般市民、文化財保護関係者などが保存を求め、その熱望が実った。商工会議所が提出した保存要望書には「棟梁堀江佐吉氏が工事を担当し、誠心誠意ことに当たったため、約六十年を経た今日も何らのゆるみを見せず厳然とそびえ、目抜き通りに君臨しておりますことは、建築業者へのよき師表であり、末永く語り伝えねばならぬものと信じます」とある。

訪れたとき、図書館の周りには足場が組まれ、屋根の補修工事が行われていた。青森銀行記念館も外壁の補修工事中だった。佐吉の建築はきちんと手を入れながら維持・活用されている。

出稼ぎ先で棟梁デビュー

北原教授は26年前に、仙台から弘前に移り住んだ。「前川國男や堀江佐吉のことを、市民は『前川さん』『堀江さん』と呼ぶんです。それを聞いたときに、よいまちだと思いました」と振り返る。「佐吉は独学で洋風建築のつくり方を会得した。その気概は弘前のいまにつながっています。市庁舎が『前川本館』『前川新館』と名付けられたのも、つくり手への敬意の表れ。週れば佐吉に対する市民の気持ちに結びつきます」。

佐吉の葬儀には1000人を超える参列者があったといい、市民によって顕彰碑も建立された。このことから、洋風建築を多々つくっただけではない、生前の功德がうかがえる。

佐吉は江戸末期の1845（弘化2）年に、弘前城下に生まれた。堀江家は祖父の代から藩の御用を勤める“お城大工”で、長男の佐吉も父のもとで宮大工系統の勉強をした。初仕事は15歳から17歳にかけて、父が棟梁として腕をふるった一乗山専徳寺で、本堂の外陣欄間に龍の彫り物をつくったといわれる。岩木山神社の玉垣の装飾も佐吉15歳のときの作と伝えられる。

佐吉は幼少より頭がよく、勉強家でもあった。14歳のときに、当時の海外事情を記した木版刷り絵入り本『海外余話』を、絵を含めて全文克明に写し取ったものが堀江家に残り、佐吉が海外の事情に強い関心を寄せていたこと、非凡な画才の持ち主だったことがわかるという。また、父が江戸藩邸の修理に行つて土産に風俗画などを持ち帰り、そこに描かれる洋風建築に興味をもっていたといわれる。

津軽地方への洋風建築の普及は、東北の他の地方に比べて遅れていた。これは弘前の近代化の立ち遅れを意味する。その背景のひとつに、廃藩置県により政治や行政の中心地が青森に移ったことがある。県庁を青森にもつていかれた弘前は、酒造業以外にこれといった産業もないことからすっかり衰退し、城下町時代の面影がないほど寂れていった。

景気の悪いまちには建設の仕事もない。佐吉は家族を養うために、大工仲間や左官職人とともに青森の官員官舎の建設工事に赴いた。すると、先輩棟梁を差し置いて、工事監督の役人は弘前組の棟梁を佐吉に命じた。1872（明治5）年、27歳のときのことだ。

佐吉は辞退しようとしたが、役人は取り合わない。

棟梁が決まっていなかった弘前組は統制が取れておらず、他県から来ていた組より仕事が遅れていた。期日は限られているから、とにかく仕事を進めるしかない。

ここで佐吉は見事な機転を利かせ、他の組の協力を得ながら弘前組の士気を高め、工事を一気に進めた。結果的に弘前組の作業場は一番先に出来上がり、他県の請負師も弘前組の先輩たちも佐吉の棟梁としての手腕に舌をまき、その名が広く同業者に知られるところとなった。

2回の渡道で洋風建築を研究

弘前で初めて洋風建築に取り組んだのは今常吉⁰⁴だ。1874（明治7）年、常吉が佐吉の家のすぐ近くで洋風の個人邸を建てはじめると、佐吉は現場に日参して技術を教わった。これが翌年、青森での歩兵第五連隊兵営工事の際に大いに役立つことになる。この兵営は当時としては珍しい洋風の木造2階建てだった。

1879（明治12）年、佐吉は開発盛んな北海道に出稼ぎに行く。津軽海峡を渡り、函館に着いた佐吉はびっくりした。まち全体が異国情緒にあふれ、外国人居留地には領事館や商館など数々の洋風建築が立ち並ぶ。佐吉は開拓使の仕事に従事しながら、これらの洋風建築を見て回り、見取り図をつくって構造を研究。さらにその工事に携わった大工棟梁や左官職人を訪ねて苦心談を聞くなど、新しい技術を貪欲に吸収し、洋風建築の基礎を身につけて弘前に帰った。

翌年、東北地方と北海道を巡幸する天皇を迎えるために、青森県内の道路や橋梁の改修工事が行われ、その工事にかかわることになった佐吉は青森に家を借り、家族や弟子、人夫を連れて行った。そして、工事が終わったあとも青森で引き続き、軍関係の施設の建設にあたった。当時の青森は北海道への関門として、また、県庁所在地として、まちの至るところで建設の槌音が聞こえるような景気のよさだった。

佐吉も次々に仕事をしていたが、弘前の東奥義塾が類焼したため再建してほしいという依頼を受け、他の仕事を取り止めて再建工事を請け負う。1886（明治19）年に新築落成した校舎は、佐吉がそれまでに培った洋風建築に対する思いを傾けたも



02 | 旧第五十九銀行本店本館（青森銀行記念館）

旧第五十九銀行は1879（明治12）年、青森県下で初、全国で59番目に設立された国立銀行。佐吉の設計施工によってこの店舗が建てられたのは1904（明治37）年。佐吉に依頼した当時の頭取は関東や関西の銀行建築をよく知っていたが、佐吉の人柄と手腕を見込み、一切を任せた。佐吉もその信頼に応えようと、寝食を忘れて設計に取り組んだ。出来上がった設計図を見た頭取は「よござんしょう」と一語したという。現在の建物は、元の位置から50m西寄りの空き地へ、向きを90度回転して移設されている。1972（昭和47）年に国の重要文化財に指定された。詳細10ページ

03 | 東奥義塾

藩校稽古館を母体に、1872（明治5）年に創立された私学。東北地方で初めてアメリカ人教師を迎えるなど、いち早く英語教育に力を入れていた。市や県への移管、廃校、再興を経て、現在の東奥義塾高等学校が歴史を受け継ぐ

04 | 今常吉

生没年不詳。弘前で初めて、また、県内でも最古といえる洋風建築に取り組んだ。士族の出だが、廃藩後いち早く文明開化の機運を察し、新しい洋風建築の技術を身につけようと仙台に赴いた。そして、弘前に帰った常吉の力量を見込み、青森県の西洋医学の先覚者である佐々木元俊が洋風建築をつくる機会を与えた。1874（明治7）年に常吉が建てた佐々木邸は木造2階建て、寄棟造りの屋根は和小屋組だったが、「小屋梁と飛梁を繋結する斜材の入れ方はどう見ても陸梁の水平筋違いのようで、常吉は洋小屋の構造に精通していたものと思われる」と市史にある。また、外壁はヒバの厚板を矢筈張りとしてペンキを塗り、窓にはガラスを使っていた。1883（明治16）年築の「角三」呉服店、現「弘前市立百石町展示館」は常吉の施工という説がある



06 | 旧津島家住宅（太宰治記念館「斜陽館」）

作家・太宰治の父にあたる津島家6代当主源右衛門が佐吉に設計を依頼した邸宅。1907（明治40）年、佐吉逝去の2カ月前に竣工した。津島家は津軽地方有数の大地主で、この邸宅も豪壮だが、太宰にいわせれば「風情も何も無い、ただ大きいのである。（中略）おそろしく頑丈なつくりの家ではあるが、しかし、何の趣きも無い。」（『苦悩の年鑑』より）。現在、建物は五所川原市が所有し、「太宰治記念館「斜陽館」」として一般公開している。詳細12ページ



07 | 商都五所川原歴史館「布嘉屋」

「布嘉（ぬのか）」は東北屈指の大富豪だった佐々木嘉太郎の屋号。佐吉の設計施工で1896（明治29）年に完成した邸宅は豪壮無比で布嘉御殿と呼ばれたが、1944（昭和19）年の大火で焼け落ちた。布嘉屋にはその10分の1の再現模型が展示されている。展示施設となっている建物は、江戸時代中期に建てられた秋田県大館市田代町の大地主の自宅を移築したもの。関連18ページ【写真：編集室】

05 | 大倉喜八郎

実業家（1837-1928）。1873（明治6）年に、日本人による初の貿易商社・大倉組商會を創業。土木事業や炭鉱事業、教育文化事業などに進出し、大倉財閥を築いた。美術品収集家でもあり、日本最初の私立美術館として「大倉集古館」を設立した



北原教授は東北大学の助手時代から弘前の景観委員を務め、このまちを何度も訪れて魅力を感じ、弘前大学赴任の際も単身ではなく初めから家族を伴った。「青森県立美術館」の設計競技アドバイザー、「十和田市現代美術館」の専門家委員や設計者選定プロポーザル審査委員長、「八戸市新美術館」のプロポーザル審査委員長を歴任【写真：編集室】

のに仕上がった。

1889（明治22）年、大倉組（現・大成建設）の依頼を受け、屯田兵舎の建設に従事するために佐吉は再び北海道に赴いた。責任者として津軽組300人を率いて工事を進めるなかでは、他県から人夫として来た荒くれ男たちとも豪胆で度量の大きな態度で接して心服させた。また、現場の視察に来た大倉組の大倉喜八郎⁰⁵も感服させた。津軽組の作業が非常に捗っており、統制もよく取れているからと大倉が慰労金を渡そうとしても佐吉は辞退し、大工職人や人夫への手当てにしてほしいと頼み、別に授けられた金一封も含めてすべて彼らに分け与えた。大倉は佐吉のその態度に、「あの人物はまったく信用できる」と褒めたという。

屯田兵村の仕事が終わったあとも、佐吉は大倉組の要望により札幌で諸工事に従事した。しかし、東奥義塾が全焼し、その再建を依頼される。急いで仕事の区切りをつけて弘前に帰り、前作に勝る力作を1890（明治23）年に完成させた。新校舎は木造ながら本格的な洋風建築で、札幌に立ち並ぶ洋風建築を熱心に研究した成果が表れていた。この

建物で佐吉の洋風建築家としての評判は決定的なものとなる。佐吉45歳のときである。

「大工佐吉之霊」に1000人超

弘前は1889（明治22）年に全国31市のひとつとして県下で最初の市制を施行。1894（明治27）年には鉄道も開通した。日清戦争後は戦勝景気で全国的に好況を迎え、さらに1898（明治31）年、陸軍第八師団司令部が弘前に設置されると、以降は軍都として繁栄。軍需景気で市内は活況を呈し、長期にわたる土建ブームで財を成した請負業者もいた。

佐吉は第八師団関係の仕事では、棟札や文献資料が残るものだけでも師団司令部、騎兵第八連隊、予備病院、偕行社の建設を手がけた。佐吉が52歳から亡くなるまでの10年間のことだ。この間には冒頭の第五十九銀行本店本館や弘前市立図書館のほか、弘前教会、七戸小学校、第五十九銀行鱒ヶ沢支店なども建てている。革秀寺や長勝寺の修理も手がけ、その際は費用を捻出できない寺に代わり、佐吉が全額立て替えた。



08 | 旧弘前偕行社（弘前厚生学院記念館）

陸軍第八師団の将校らの集会所・社交場として、弘前藩9代藩主の別邸跡地で市内屈指の名庭園があった場所に、1907（明治40）年に建てられた。木造平屋建て、寄棟造り。洋風建築だが、庭に面する南廊下には縁側の雰囲気もある。7年がかりの大規模な復原工事が2019（令和元）年に完了した。詳細13ページ



09 | 弘前れんが倉庫美術館

明治・大正期に酒造工場として建てられ、戦後シードル（りんごの発泡酒）工場となった煉瓦倉庫を再生・活用した芸術文化施設。2020（令和2）年に開館。美術館棟とカフェ・ショップ棟からなる。フランス・パリを拠点に活動する建築家の田根剛が改修設計を手がけた。「記憶の継承」と「風景の創生」をコンセプトとし、既存の煉瓦壁を可能な限り残している。煉瓦壁は内外とも無傷で保存するためにPC鋼棒を用いて耐震補強した。「シードル・ゴールド」と名づけられた屋根はチタン材を使用。陽極酸化法によって加工された皮膜表面が光の角度で発色する。弘前市は煉瓦倉庫に隣接する緑地も一体に整備。美術館棟とカフェ・ショップ棟の間の煉瓦を敷設した「ミュージアム・ロード」は緑地内にも続く。北原教授は整備検討委員会の委員長を務めた。関連21ページ



「堀江佐吉は生涯に1000件以上の建物をつくったといわれていますが、ほとんど現存しません」と北原教授。数少ない佐吉の現存建築では、作家・太宰治の生家である「旧津島家住宅⁰⁶」も必見だ。五所川原市金木町にある。金木町に向かうのに五所川原駅で津軽鉄道に乗り換える際は、布嘉屋⁰⁷にも寄りたい。

最盛期の堀江組は総勢700人余といわれ、棟梁級の大工も10人近くいて、県下で最も大きな力を持ち、佐吉の包容力と統御の妙により高い結束力も誇った。佐吉は輩下の者たちの面倒見がよく、慕われていた。自分の知ることは隠さず親切に教え、質屋から借りた金で気前よく飲み食いさせた。佐吉は自分の理想通りに仕上げるために、気に入らないところは損得抜きで何度でもやり直したから、大きな仕事をしているわりには金がなかった。

1907（明治40）年、「旧弘前偕行社⁰⁸」が起工するが、佐吉は完成を見ることなく、62年の生涯を閉じた。葬列は会葬者が1000人を超えたため道順を変更しなければならぬほど盛大だったが、霊柩の旗にはただ「大工佐吉之霊」とだけ書かれていた。これは佐吉の遺言によるもので、彼は家族に「世の人たちは棟梁と呼んでくれるが、そんな柄ではない」と常々話していたという。

佐吉が残した洋風建築はいま、明治期に建てられた教会とともに弘前の観光資源となっている。東奥義塾があったことから弘前には昔から教会が多

い。古い建物が残るのは第二次大戦で空爆を受けなかったことも理由のひとつだが、陸軍師団が置かれていたにもかかわらず弘前が空爆を受けなかったのは、宣教師が多くいたからとする説がある。

北原教授は「宣教師を通じて外国文化の影響を受けることはあったでしょうが、それ以前に弘前は奥羽越列藩同盟を脱退して官軍側についた歴史に見るように、城下町とはいえ決して保守的ではありません。リベラルで、進取の気質がある。他の城下町にはないハイカラな雰囲気は、そこから生まれているのだと思います」と話す。「昭和中期に当時の弘前市長が世田谷区庁舎を見て、前川に市庁舎や市民会館の設計を依頼したのもすごい話でしょう。あんなにブルータルな建築なのに」。太宰が自伝的小説「津軽」のなかで「弘前の城下の人たちには何が何やらわからぬ穠々たる反骨があるようだ」と綴ることに通じるだろうか。

2020（令和2）年、「弘前れんが倉庫美術館⁰⁹」が開館した。明治末期から大正期につくられた煉瓦倉庫を再生したこの美術館も、佐吉の洋風建築や前川のモダニズム建築と同じように、弘前というまちの歴史を未来へと伝えていく。

「棟梁堀江佐吉翁記念碑¹⁰」と名前のみ刻まれた石碑は、美術館から徒歩7-8分の最勝院という寺の境内にある。北原教授に促されて旅の締めくりに寄ってみると、それは当時の人々の思いを表すように、仰ぎ見る大ききだった。

堀江佐吉 略年表			
1845（弘化2）年 “お城大工”伊兵衛の長男として弘前城下に生まれる	1879（明治12）年 出稼ぎのため北海道に渡る	1896（明治29）年 五所川原で佐々木嘉太郎邸（布嘉）竣工	崎小学校が竣工
1860（万延元）年 岩木山神社の玉垣を装飾	1886（明治19）年 設計・施工を手がけた最初の洋風建築となる東奥義塾の校舎が竣工	1897（明治30）年 弘前美以教会竣工	1906（明治39）年 弘前市立図書館、第五十九銀行鱒ヶ沢支店が竣工
1862（文久2）年 一乗山専徳寺本堂の建築を父のもとで手伝う。伽藍の外陣欄間の龍を製作	1889（明治22）年 屯田兵舎建築のため渡道	1898（明治31）年 第八師団司令部その他竣工	1907（明治40）年 津島家住宅竣工。弘前偕行社起工。8月逝去。11月弘前偕行社竣工
1872（明治5）年 青森県官員官舎の建築で工事監督より棟梁を拝命	1890（明治23）年 全焼した東奥義塾の校舎を再建	1904（明治37）年 七戸小学校、弘前予備病院、第五十九銀行本店が竣工	1908（明治41）年 最勝院境内で「棟梁堀江佐吉翁記念碑」建立除幕式
		1905（明治38）年 第五十九銀行七戸支店、藤	



10 | 棟梁堀江佐吉翁記念碑

石碑は佐吉が亡くなった翌年に建立された。大きさは高さ約7m、幅2.1-2.4m、厚さ30cm余り。弘前停車場から金剛山最勝院（真言宗智山派）境内までソリを用いて碑石を運搬するが、巨大なために困難を生じ、1000人近い人々が運搬を手伝った。堀江組が請け負っていた工事に従事する職人や鳶職も大勢応援に繰り出したという。最勝院境内には国指定重要文化財の五重塔も立つ【写真提供：堀江組】

北原啓司 きたはら・けいじ
1956年三重県生まれ。1979年東北大学工学部建築学科卒業。1985年東北大学大学院工学研究科博士課程単位取得退学。東北大学工学部建築学科助手を経て、1994年に弘前大学教育学部助教授に着任。2003年より同教授。2014年より同大学大学院地域社会研究科長を兼任。青森県内をはじめ東北地方の各自治体の都市計画や住宅政策、景観にかかわる委員を数多く務める。

長井美暁 ながい・みあき
編集者、ライター／山形県出身。日本女子大学家政学部住居学科卒業後、『室内』編集部に所属。2006年よりフリーランス。

旧第五十九銀行本店本館 （青森銀行記念館）

1904年

設計 | 堀江佐吉

佐吉の最高傑作 完成度の高い和洋折衷手法

現在の青森銀行の母体となった旧第五十九銀行の本店として、堀江佐吉の設計施工により建てられた。工期は2年半。木造2階建てで、外観はルネサンス風の意匠を基本とし、腰を基壇風に見せ、柱型を2階まで通している。正面頂上に装飾塔を設けた屋根は、周囲にパラストレード（欄干）を回し、雪止めの実用面も考慮。1階の窓は上部にベディメントを付けており、2階とは意匠が異なる。銀行建築として、窓は外側に漆喰塗りの引き戸を取り付け、壁も板の上に瓦を張り、土蔵と同じように漆喰で塗り籠めた防火構造だ。漆喰の厚さは4.5cmある。

内部は主屋の右手後方に角屋が接続する。主屋の1階は営業室と客溜まりに区画され、角屋には頭取室と応接室を配置。2階には大会議室と小会議室があり、大会議室は柱の芯々で約14.5m（48尺）四方という大空間だ。

屋根は主屋・角屋ともに寄棟造りで、小屋組はキングポストトラスを基調としているようだが、本来のトラス構造ではなく和洋折衷といえる。また、塔屋と屋根窓はトラスより束を立てた和小屋組で、佐吉の創意工夫がうかがえる。

棟札の表面には棟梁として佐吉の名、裏面には工事世話方として齋藤伊三郎（佐吉の四男）、大工職として堀江幸治（佐吉の七男）の名がある。堀江家あげの一大工事だった。



1



2

- 1 正面の屋根頂上の装飾塔は先端に相輪の請花が飾られ、インドの寺院を思わせる佇まいだ。屋根は椽瓦に煉瓦や銅板を取り合わせている
- 2 1階の営業室と客溜まり。柱などはすべて県産のケヤキ材を使い、建具も県産のヒバ材を用いた。堀江が自ら山を歩き回って探したものといわれている
- 3 2階の大会議室。柱を1本も立てずに大空間を実現。天井には金唐革紙を使用



3

旧弘前市立図書館

1906年

設計 | 堀江佐吉

設計施工だけではなく 仲間と建設資金を出し合い市に寄付

日露戦争にかかわる第八師団の戦時公共物の仕事を大量に請け負い、多くの利益を得た土木建築請負師の齋藤主や佐吉など5人は、その利益の一部を市民に還元したいと考えた。そして私設図書館の窮乏を聞き、図書館を建てて弘前市に寄付することにし、この建物をつくった。敷地は東奥義塾の敷地内約200坪の使用を市により許可された。

双塔ルネサンス様式、木造3階建て。双塔形式は、この建物をよりモニュメンタルなものにしようとする佐吉の意欲の表れだ。当初は2階建て、建坪20坪程度の予定で図面が引かれていたが、設計施工を任された佐吉は、第五十九銀行本店竣工の直後ということもあり、建てるなら後世に範を示すようなものになりたいと考えて設計を大幅に変更。約4倍の規模になったため、当初の予算1400円ではとてもつくれず、約3500円の超過分は齋藤と佐吉のふたりで負担したと伝えられる（金額はいずれも当時）。

基礎石には大鰐産の鱗石を使い、木材は、土台はヒバ、柱・桁・梁はほぼスギ。屋根は亜鉛引き鉄板を煉瓦色に塗装したもの。壁は木舞下地に漆喰塗り。内部は板壁仕上げもある。この規模の建物としてはかなりの費用をかけており、小さくともしっかりしたものをつくりたいという佐吉の気持ちが表れている。

双塔は八角形。頂上の飾りはルネサンス独特のもの、一方で各階の底の下の木鼻は寺院建築に使われるもの。全体の調子は洋風だが、和風を巧みに溶け込ませている。

- 1 正面外観。石積み基礎に白漆喰壁、屋根は煉瓦色の鉄板で覆われている。玄関ポーチのベディメント、正面の屋根窓、左右に配した八角形の双塔ドームなど、佐吉晩年の洋風技法の確かさを感じさせる
[写真提供：弘前市教育委員会文化財課]
- 2 1階の婦人閲覧室。正面から見て右側の八角形の内部
- 3 1階は旧図書館の形態を復元して公開し、旧図書館の関連資料を展示
- 4 2階と3階を結ぶ階段。現在は使用不可。2階では郷土の出版社の出版物を展示し、郷土の文学の動向や文芸団体の活動を紹介している



3



1



2



4

MAP 2

05

旧津島家住宅 （太宰治記念館「斜陽館」）

1905年（文庫蔵）、1907年（主屋）

設計 | 堀江佐吉

入母屋造りに洋風小屋組 和洋折衷の太宰治の生家

津島家6代当主の源右衛門が佐吉に設計を依頼し、佐吉の四男・斎藤伊三郎が棟梁として施工にあたった。1906（明治39）年に着工したが、佐吉は健康が優れず、完成した姿を見ずに他界した。津島家は津軽地方有数の大地主で、源右衛門は金木銀行を設立して頭取を務めたほか、県会議員や衆議院議員も務めた。

表通りに西面して主屋があり、正面と側面に煉瓦塀をめぐらせている。1階は11室278坪、2階は8室116坪。泉水を配した庭園や文庫蔵、中ノ蔵、米蔵の蔵3棟を合わせて敷地面積は約680坪という豪邸だ。米蔵に至るまで日本三大美林の青森ヒバを使っている。総工費4万円は現在の7-8億円に相当する。

木造2階建ての主屋は入母屋造りの屋根で外観は和風だが、内部は1階に洋風の店（金融業店舗）があり、階段ホールや2階の応接間にも佐吉の特徴が見られる。また、屋根構造はキングポストトラスによる洋風小屋組だ。

建物は戦後、農地改革により津島家が手放し、買い取った人物が旅館「斜陽館」を開業。1996（平成8）年まで営業していた。その後、旧金木町が建物を買い取り、復元修復工事を経て「太宰治記念館『斜陽館』」となった。なお、太宰は金木町について「どこやら都会ふうになちょっと気取った町」と著書『津軽』に記す。



1



2

- 1階の店（金融業店舗）部分は洋風の意匠
- 座敷から階段ホールを見る。和洋の意匠が隣り合う。奥に店（金融業店舗）
- 台所は吹き抜けの板の間で、上部はトラスの洋風小屋組が露わになる。板の間中央の炉端は幼少の太宰がよく遊んでいた場所という



3

MAP 3

29

旧弘前偕行社 （弘前厚生学院記念館）

1907年

設計 | 堀江佐吉

将校たちの社交場として 瀟洒な佐吉の遺作

弘前に陸軍第八師団が設置されたことで建設された将校らの集会所・社交場。堀江佐吉最後の設計となる建物だ。施工は長男・彦三郎と六男・金蔵が棟梁として現場を仕切り、佐吉は着工の2カ月後に病没した。

木造翼棟付きの平屋建て、建築面積は約960㎡。ルネサンス様式を基調に、窓まわりの飾り枠や上部に付けた楕形や三角形の破風飾りなど、豊かな装飾を備えている。屋根は寄棟造りの瓦葺き、小屋組はキングポストトラス構造だ。

戦後は軍の解体により、建物は弘前女子厚生学院（現・弘前厚生学院）に払い下げられ、校舎や併設の保育園の園舎として使われたのち、1980（昭和55）年からは記念館として公開活用された。2013（平成25）年、建設当初の意匠に復元する大規模な保存修理工事が始まり、2019（令和元）年に完了。天井・壁面上部の白漆喰塗りや、床のリノリウム張りなどが復元された。現在は再び一般公開しており、地域コミュニティの場としての活用も進めている。

偕行社は国内58カ所、海外8カ所にあったが、建物が現存するのは国内6棟、台湾に1棟。ここはその貴重な1棟で、庭園と一体的に保存されているのは全国でも珍しいという。国の重要文化財に指定されている。



1



2

- 玄関ポーチの柱は鉄製。保存修理工事により、外壁や軒、屋根瓦は建設当時の色に復元された
- かつての師団長室。日当たりのよい南側に位置する
- 会場。各部屋の漆喰天井の繊細な中心飾りは当時のまま。暖炉の側壁には外国製と思われるタイルが使われている



3

テーマ2

ゆりかごから墓場まで 親しまれる前川國男の建築

取材・文 | 磯 達雄
写真 | 小松正樹 (特記以外)

- 1 「弘前市民会館」(1964)。楽屋入り口の扉やホワイエの壁など、ところどころに用いられた原色がアクセントになっている。関連19ページ
- 2 「木村産業研究所」(1932)。ル・コルビュジエの下で修業した前川國男が帰国して最初に手掛けた作品。関連19ページ
- 3 「弘前市庁舎」。右側が1958年竣工の前川本館で、左側が1974年竣工の前川新館。関連19ページ
- 4 「弘前市緑の相談所」(1980)。弘前公園の景観になじませるため、建物の高さを抑え、勾配屋根を架けている。「中に入るとガラス越しに桜の木が見えてすぐく素敵」と葛西ひろみさん

堀江佐吉と並んで弘前の建築に大きな役割を果たした人物が前川國男(1905-1986)だ。前川は「神奈川県立図書館・音楽堂」(1954)や「東京文化会館」(1961)などを設計した戦後日本を代表する建築家。その作品が弘前には8件もあり、地元の人たちに親しまれている。近年は観光資源としても活用されるようになったが、そのきっかけは市民による「前川國男の建物を大切にする会」の活動だった。

観光客としてまちを初めて訪れたときに、まず立ち寄るのが駅構内にある観光案内所だろう。そこにはその地域の観光スポットを紹介したガイドマップが置かれている。弘前駅にもそれはある。まず目に入るのは、桜で有名な弘前公園や堀江佐吉が建てた洋館群だが、加えて載っているのが前川國男の建築作品だ。地図に場所がプロットされ、写真や解説文も付いている。念のため付け加えると、これが専門家向けではなく、あくまでも一般の観光客を対象にした無料のパンフレットなのである。

「日本近代建築の巨匠、前川國男建築を訪ねる」として紹介されている建物は、「木村産業研究所」(1932)、「弘前中央高等学校講堂」(1954、20ページ参照)、「弘前

市庁舎」(1958)、「弘前市民会館」(1964)、「弘前市立病院」(1971、21ページ参照)、「弘前市立博物館」(1976、20ページ参照)、「弘前市緑の相談所」(1980)、「弘前市斎場」(1983、18ページ参照)の8件。これが少し頑張れば歩いて回れる範囲に集まって立っている。

前川が弘前とかかわるようになった理由は、母・菊枝の実家が弘前藩の重臣だったこと。菊枝の兄にあたる佐藤尚武(1882-1971)は国際連盟の事務局局長としてパリに赴任し、前川がル・コルビュジエのアトリエで働いたのも、その義理の兄を頼ったことだった。前川はパリで弘前出身の実業家・木村静幽(1841-1929)の孫で、当時、駐仏日本大使館付の武官だった木村隆三(1899-1944)と出会う。そして弘前の地場産業を育成する機関である木村産業研究所の設計を依頼されたのだった。

それからのち、前川は青森県や弘前市からの依頼で公共建築を次々と手がけていく。数の多さだけでなく、デビュー作から遺作にあたる作品まで、建築



1



2



3



4

家としての全キャリアにわたる作品がそろっていることも重要だ。そしてそれらがすべて残り、現在も使われているという点もありがたい。弘前を訪れば、前川國男という建築家の生涯を一望できるのである。

弘前の前川作品のうち、「木村産業研究所」と「弘前市庁舎本館」は国の登録有形文化財にもなった。ちなみに市庁舎は1958(昭和33)年に建てられた棟が「前川本館」、1974(昭和49)年に増築された棟が「前川新館」(1992年に新館をさらに増築)と呼ばれている。モダニズムの建築家が、これほどまちぐるみでリスペクトされているところは、日本でほかにないだろう。

地元の一般市民が会を結成 「こんなすごい建築に 小さいころから接していたんだ」

弘前でも20年前までは前川國男について知る人はまだ少なかったという。広まるようになったきっかけのひとつが、「前川國男の建物を大切にする会」の活動だ。2004(平成16)年に発足したこの会は、スライドレクチャー、建物めぐりのツアー、中央高等学校講堂の椅子補修ボランティアなどのほか、2006(平成18)年には「前川國男生誕100年祭」のイベントを盛大に開催している。活動の一環として、弘前市内の前川建築マップも制作。2010(平成22)年には1万部を無料配布した。こうした先例があって、現在は観光案内所で配るパンフレットにも前川の建築を載せるようになったのだ。

会のメンバーには建築の仕事を専門としている人もいたが、ほとんどはそうではない普通の人たちだった。なぜ前川の建築にこんなに魅かれたのか。元代表で創立メンバーのひとりである葛西ひろみさんは、子どものころの思い出をまじえてこのように語る。

「中学生だったとき、文化祭の最後の催しをそこで行うということで、初めて弘前市民会館へ行った

んです。コンクリート打ち放しの建物を見て、これはまだ工事中だと思いました。でもその中に映える赤いドアが印象的で、とてもかっこよかった」。

「木村産業研究所も通学路の途中にあったので、毎日のように外から見ていましたが、近寄りたがった雰囲気でした。1995年くらいに初めて中に入って、空間が素晴らしかった。こんなすごい建築に、小さいころから接していたんだ、とわかりました」。

弘前の市民にとって、前川の建築は非常に身近な存在だ。そこから、その価値を共有できる機運も生まれる。

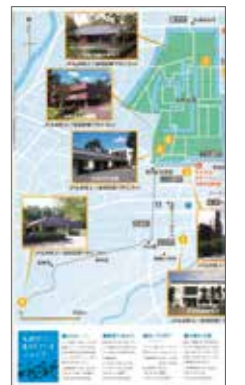
「前川さんの病院で生まれて、前川さんの学校や文化施設で育ち、最後は前川さんの斎場で弔ってもらった。ゆりかごから墓場まで、お世話になるんです」。

そんな存在だからこそ、前川の建物を大切にしようと市民に呼びかけたかったと、会を立ち上げた動機を葛西さんは振り返る。

広まりはじめた観光資源としての モダニズム建築の可能性

前川建築を観光資源と捉えて活用しようとする流れは、日本の他の地域にも波及しはじめている。前川國男の建築を文化交流の拠点として活用している全国の自治体で、近代建築ツーリズムネットワークが2016(平成28)年に発足。埼玉県、東京都、神奈川県、岡山県、熊本県、新潟市、福岡市、弘前市でスタートし、そこに石垣市が加わって9自治体が参加する。各自治体では、展覧会、シンポジウム、ツアー、見学会などの活動をそれぞれに行い、盛り上げている。こうした動きを先導したのが弘前市であり、その始まりは普通の市民による手弁当の活動だったのだ。

モダニズム建築の価値を一般の人たちに理解してもらうことは難しい、との嘆きを耳にすることがある。それはどうすれば可能になるのか。答えを見つけるには、まず弘前を訪れてみるのがよいかもしれない。



「前川國男の建物を大切にする会」が2010年に発行したパンフレット『自転車でもぐる!! 前川國男の建物たち』から抜粋。前川建築のほか、おしゃれな飲食店や雑貨屋も紹介している。現在は配布していない

各施設の見学申し込みについては、下記を参照
<http://www.city.hirosaki.aomori.jp/shiminkaikan/kentiku-map.pdf>

磯 達雄 いそ たつお
建築ジャーナリスト/1963年埼玉県生まれ。1988年名古屋大学工学部建築学科卒業。1988-1999年日経アーキテクチャ編集部に勤務。2002年-2020年3月フリックスタジオ共同主宰。2020年4月よりOffice Bungaを共同主宰。現在、桑沢デザイン研究所および武蔵野美術大学非常勤講師。

弘前・五所川原 建築めぐり

HIROSAKI・GOSHOGAWARA

参考

- 青森県史デジタルアーカイブシステム「青森県の暮らしと建築の近代化に寄与した人々」(https://www2.j-repository.net/contents/kenshi-front/) 2020.9.17アクセス
- 記念誌『建築家・前川國男 生誕100年祭〈弘前で出会う 前川國男〉』前川國男の建物を大切にする会、2008
- 津軽ひろさき検定実行委員会編『津軽ひろさき検定 公式テキストブック』公益社団法人弘前観光コンベンション協会、2008
- 「ひろさきガイドマップ」公益社団法人弘前観光コンベンション協会、2019
- 弘前市ホームページ「趣のある建物」『近代建築ツーリズムネットワーク』『弘前市の前川建築』(http://www.city.hirosaki.aomori.jp/) 2020.9.17アクセス
- 船水 清『棟梁 堀江佐吉伝』白神書院、2012
- 文化庁 国指定文化財等データベース (https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index) 2020.9.17アクセス
- 前川國男の建物を大切にする会ホームページ (http://maekawanokai.com/) 2020.9.17アクセス

おことわり

04-21ページの作品名称は文化財指定名称とし、ほかは原則として2020年10月時点の施設名称を使用しています。

弘前は青森が県庁所在地となる前から津軽地方の中心であり、城下町として栄えた歴史都市だ。弘前城と桜は有名だがそれだけではない。このまちはむしろ近代建築の宝庫。明治の幕開けとともにハイカラに変貌を遂げたまちだ。国内最初期の洋館が建てられてゆが、お雇い外国人ではなく、日本の棟梁が意匠設計を行っているところに特徴がある。堀江佐吉はその筆頭。国策による近代化ではなく、西洋式の開発が進む北海道の技術を吸収しつつ、地元の力で近代化を果たしていったのだ。戦中の空襲を免れたため重要建築は比較的遺されている。

昭和には近代建築の巨匠・前川國男の公共建築が次々とつくられ、市民の原風景になっていった。前川建築がこれほど集中する都市も少ない。2人の巨匠の珠玉の名

作がいまも残る建築のまちが、弘前なのだ。弘前から北へ足をのびし、津軽の港である十三湊や鰺ヶ沢と弘前を中継する位置に五所川原がある。物流拠点であり、商都であるこのまちには、地元名士の洋館が建てられていた。最大級は「布嘉」と呼ばれる佐々木嘉太郎の邸宅だが、残念ながら焼失。少し離れた金木に建てられたのが、太宰治の生家である津島源右衛門邸、現「斜陽館」だ。これらは堀江佐吉によって建てられた、和洋折衷の名作だ。

建築遺産は保存だけではなく、活用も進む。昨今の注目は弘前れんが倉庫美術館。生きた名作を身近に感じられるまちをめぐり歩いてみよう。

写真 | 小松正樹 (特記以外)



01

弘前シールド工房kimori

設計 | 鎌塚学建築設計事務所
竣工 | 2014年

弘前市清水富田寺沢52-3 (弘前市りんご公園内)
若手のりんご生産者たちが中心となって立ち上げたシールド工房。イベントスペースとして貸し出しもしている。運営者である百姓堂本舗のスタッフは「弘前りんご農家は後継者不足。いまのままでは、りんご産業が廃れ、りんごとともに育まれてきた文化がなくなってしまう。畑を見ながら、そうした文化やりんごについて知ってもらいたいです」と、語る。白い方形屋根の下には、畑に向けてウッドデッキが広がる。店内の椅子やテーブルは、りんごの木でつくられたもので、薪ストーブにくべる薪にも、りんごの木を活用している。積雪を考慮したディテールも見どころ。2014年グッドデザイン賞受賞



03

立佞武多の館

設計 | INA新建築研究所 竣工 | 2004年
五所川原市大町506-10

毎年夏に催される「五所川原立佞武多祭り」に登場する巨大な「大型立佞武多」の展示・製作所を兼ねた施設。商都として栄えた五所川原では、夏祭りのたびに豪商や大地主が富の象徴として、ねぶたの大きさを競ってきた。「立佞武多」は、大正の初めに姿を消したこの巨大なねぶたを、平成に入り市民有志が復活させたもので、高さ23m強、重さは19トンにも及ぶ。施設内には祭りに登場する、大型立佞武多3台を常時展示。スロープにそって頂部から足元まで間近に見学できる。祭り当日、前面のガラスカーテンウォールがスライドし、館内から街中へと大型立佞武多が引き出される様子は圧巻だ



06

津軽鉄道旧芦野公園駅本屋 (現・赤い屋根の喫茶店「駅舎」)

設計 | 不詳 竣工 | 1930年
五所川原市金木町芦野84-171

駅のプラットフォームから直接入店可能な喫茶店。もと駅舎だった建物は、太宰治の小説『津軽』にも登場する。一時は物置小屋となっていたが、地元のNPO法人が最小限手を加え、喫茶店として活用。現在は個人が運営にあたる。「津軽鉄道で一番小さな駅舎でした。でも赤い屋根がかわいくて、ハイカラな建物でしょう。大切に残していきたい」と、この地で生まれ育った栄利店長。メニューに「切符」とある通り、券売所も兼ねている。登録有形文化財



02

弘前市斎場

設計 | 前川國男建築設計事務所 竣工 | 1983年
弘前市常盤坂2-20-1

岩木山を背に佇む、前川國男が唯一手がけた斎場建築であり、弘前で生前最後の作品。元所員の松隈洋氏は「(前川さんは)死というものをリアルに感じながら、この死者を送る施設の設計を考えていたのです」と語る。収骨室上部の天窓は、故人の魂を山に返すため岩木山の方向に光が抜けるよう計画。低く大きな勾配屋根と重厚な格子梁が遺族を静かに迎え入れる。受賞にJIA25年賞ほか。詳細は『LIXIL eye』no.16、32ページ、「建築家の(遺作) 01」参照 ※見学は、基本的に16:15-17:00の間。事前に電話連絡



04

商都五所川原歴史館

設計 | 不詳
竣工 | 江戸時代中期
移築 | 1997年
五所川原市一ツ谷515-2



05

旧津島家住宅 (太宰治記念館「斜陽館」)

設計 | 堀江佐吉 竣工 | 1905年(文庫蔵)、1907年(主屋) 修復 | 1997年
五所川原市金木町朝日山412-1



07

宋螺堂

設計 | 不詳 建立 | 1839年
弘前市西茂森2-9-1

曹洞宗三十三ヶ寺が連なる「禅林街」。弘前藩2代藩主・津軽信枚が、弘前城の裏鬼門にあたるこの場所に、津軽一円から曹洞宗の寺院(禅寺)を集めさせ誕生したエリアだ。その一角に立つ仏堂。天明、天保の大飢饉や海難で命を失った死者の御霊を弔うため、当地の豪商が発願して建立された。八角形の内部は右回りの螺旋階段と直進階段を併用して昇降する。市指定有形文化財



09

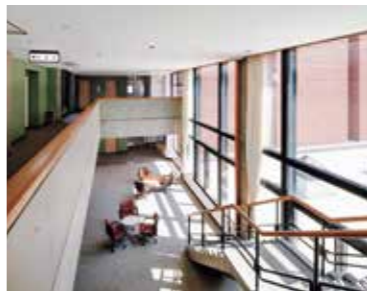
弘前市庁舎 (前川本館、前川新館)

設計 | 前川國男建築設計事務所
改修設計 | 前川建築設計事務所
竣工 (前川本館) | 1958年

増築 (前川新館) | 1974年、1992年 (設計 | 前川建築設計事務所)
改修 | 2017年 (前川本館・前川新館)

弘前市上白銀町1-1

「群青色は日本の夜明けの色」「赤は人を楽しく高揚させる色」と語った前川。冬場、雪に閉ざされ色彩が乏しくなるところに彩りを与えよう、階段や正面玄関の真上などに赤や群青を配し、訪れた者を楽しませる工夫が施されている。大きな庇、重厚なコンクリート打ち放しとレンガブロックを用いた庁舎は、城下町・弘前にふさわしい風格をもつ。本館は登録有形文化財



08

木村産業研究所

設計 | 前川國男 竣工 | 1932年
弘前市在府町61

前川國男27歳の処女作。淡いフレンチブルーの窓枠、玄関ホール上部とピロティ上部の鮮やかな赤色と、色使いも前川のごこだわりが感じられる。正面玄関上のバルコニーは、凍・雪害により竣工から十数年後に撤去されていたが、「前川國男の建物を大切にしたい」との呼びかけをきっかけに2013年に再現。登録有形文化財、日本におけるDOCOMOMO選



10

旧藤田家別邸洋館

設計 | 堀江金蔵
竣工 | 1921年

弘前市上白銀町8-1

弘前出身で日本商工会議所会頭を務めた実業家・藤田謙一の別邸。堀江佐吉の六男・金蔵の設計で、施工は長男・彦三郎が手がけた。建物は木造2階建て。赤い屋根をもつ八角形の塔屋や煙突、反りをつけて玄関先まで下ろした大屋根など、意匠を凝らしたつくりとなっている。東京から庭師を招いてつくらせた日本庭園も見事。1階の大広間とサンルームはカフェとなっており、庭園を見ながら市内の洋菓子店から集めたさまざまなアップルパイが楽しめる。登録有形文化財



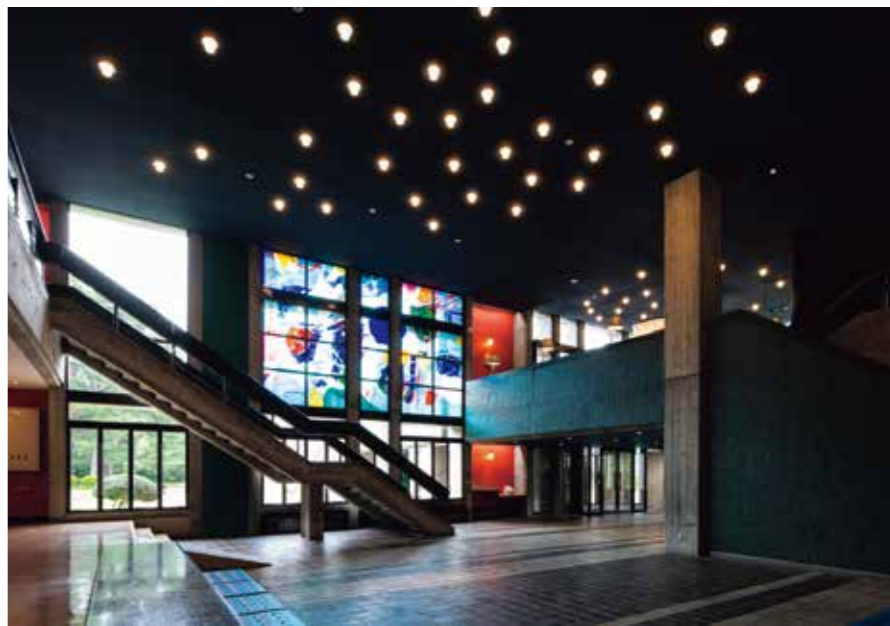
11

弘前市民会館

設計 | 前川國男建築設計事務所
改修設計 | 前川建築設計事務所、アトリエアーク一級建築設計事務所
竣工 | 1964年 改修 | 2013年

弘前市下白銀町1-6 (弘前公園内)

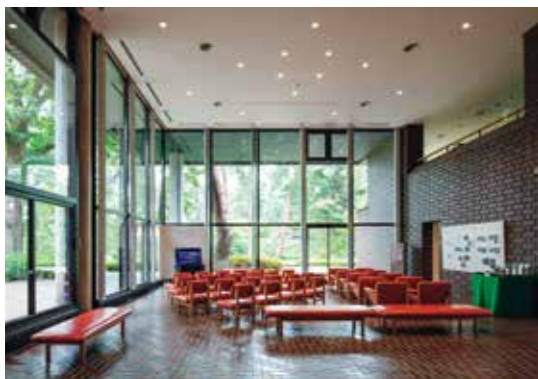
管理棟とホール棟を、ポーチで結んだ平面構成をもつ。ポーチの上のテラスで、岩木山を望みコーヒーを飲みたいと前川は語ったというが、現在、カフェとして使われており、市民の憩いの場となっている。打ち放しコンクリートの外装から一転して、壁や天井に配された鮮やかな色使いも見どころだ。ホール棟ホワイエには、銅管を使ったシャンデリアがきらめく。BELCA賞ロングライフ部門受賞



12

弘前市立博物館

設計 | 前川國男建築設計事務所 竣工 | 1976年
弘前市下白銀町1-6 (弘前公園内)
コンクリート打ち放しの市民会館との対比も美しい赤茶色のタイルをまとった建築。この赤茶色のタイルこそ、前川が独自に開発した工法「打ち込みタイル」だ。タイルをコンクリートと一緒に固めることで、剥離しにくく、かつ温かみのある表情が生まれている。前川が手がけた数々の建物で用いられているが、建物ごとにタイルの色や大きさが異なるので、その違いを体験してほしい。ロビーの大きなガラス窓からの景色も楽しみたい。BELCA賞ロングライフ部門受賞



13

旧弘前市消防団西地区団第四分団消防屯所 (旧紺屋町消防屯所)

設計 | 不詳 竣工 | 1933年ごろ
弘前市紺屋町2-2
当時の名士の寄付により建築された火の見櫓が目を引く建物。弘前市では、2009年から明治・大正期の洋風建築物などの文化財、また文化財に指定されていないものの、まちの風情を醸し出している古い建物を「趣のある建物」として指定。市民や観光客に広く発信し、地域資源として活用している。この建物もそのひとつだ。景観との調和も楽しみたい



18

旧第五十九銀行本店本館 (青森銀行記念館)

設計 | 堀江佐吉 竣工 | 1904年 修復 | 1985年
弘前市元長町26



14

石場家住宅

設計 | 不詳 竣工 | 江戸時代中期
弘前市亀甲町88
藩内の薬工品や荒物を扱っていた商家。いく度が改築が行われたが、最初の建築は18世紀前半で、主屋は19世紀初頭にほかの場所から現在地に移築されたもの。表通りには長さ18.2メートルもある雪国特有の深い庇「こみせ」をもち、斬(ちょうな)で角材に仕上げた大きな梁組など豪華な構えとなっている。特筆すべきは、いまも住宅兼店舗として使われている生きた建築だということだ。津軽地方の数少ない商家の遺構が体験できる。国指定重要文化財



▶p.14-15参照

15

弘前市緑の相談所

設計 | 前川國男建築設計事務所 竣工 | 1980年
弘前市下白銀町1-1 (弘前公園内)

16

弘前中央高等学校講堂

設計 | 前川國男建築設計事務所 竣工 | 1954年
弘前市蔵主町7-1
市民会館誕生前は、音楽鑑賞の場として市民に親しまれてきた建物。フレンチブルーに塗られた鋼板の外壁、軒裏の赤色と、ここでも効果的に色が用いられている。前川がデザインした座席806脚を「前川國男の建物を大切にす会」とボランティアが丸2年かけて補修。耐震補強工事も行い、前川設計の音楽ホールの先駆けとなる建物として大切に使われている。日本におけるDOCOMOMO選ほか [写真提供: 前川國男の建物を大切にす会]
※学校敷地内へ立ち入っての見学はご遠慮ください



17

カトリック弘前教会

設計 | オージェ神父 竣工 | 1910年
弘前市百石町小路20
弘前では教会建築をよく目にする。これは明治初期から、英語教育を導入するために外国人教師を招いてきたこと、彼ら教師からキリスト教がもたらされたことが影響している。明治末期に建てられたこの教会は、木造モルタル平屋建て、尖塔や開口部の半円アーチなどロマネスク様式を基調としている。施工は堀江佐吉の弟で、自らもクリスチャンだった横山常吉。木製のクロスリア・ヴォールト、精緻なゴシック様式の祭壇、そして足元は畳と、和洋が溶け合った折りの空間が広がる



▶p.07、10参照

▶p.11参照

20

旧弘前市立図書館

設計 | 堀江佐吉 竣工 | 1906年 移築・復元 | 1990年
弘前市下白銀町2-1 (追手門広場内)

21

中三 弘前店

設計 | 毛綱毅曠建築事務所 竣工 | 1995年
弘前市土手町49-1
地上8階、地下1階。商店が軒を連ねる土手町界隈で、逆円錐形の巨大架構とステンレスの輪が一際目を引く老舗百貨店。逆円錐形の内側には、多目的ホールが入る。この独特な形は、風水に基づき岩木山の気を取り入れるためにデザインされたという。内部の売り場への主要動線である円形の吊り階段、建物東側の屋外階段のダイナミックな造形も見どころ



22

スペース・デネガ

設計 | 上遠野徹 竣工 | 1983年
弘前市上瓦町11-2
弘前の文化活動を支えてきた老舗のレンタルスペース。建物は、北方の気候・風土に合った建築の設計に取り組んできた上遠野徹の設計で、煉瓦への強い想いが込められている。「時が経つにつれて風格や深い味わいが現れてくる素材は他にはないでしょう」(上遠野徹「カムイミナ」りんゆう観光、1984年5月号)。施主の煉瓦への思い入れも強く、煉瓦は「できるだけ汚く焼いてほしい」と注文をつけ、北海道江別市の米澤煉瓦で焼いたもの。その表情をぜひ楽しみたい



24

弘前れんが倉庫美術館

設計 | Atelier Tsuyoshi Tane Architects、NTTファンリティーズ (ミュージアム棟設計統括)、スターツCAM (カフェ・ショップ棟設計統括)
竣工 | 2020年
弘前市吉野町2-1



25

弘前市立病院

設計 | 前川國男建築設計事務所 竣工 | 1971年
弘前市大町3-8-1



木村産業研究所や市民会館などの設計を通じ、建物の凍害を教訓に設計に取り組んだ病院建築。窓を壁面よりセットバックさせたのは、積雪を防ぐため。一方、屋根はあえてフラットルーフとし、屋上をリハビリのためのスペースとして計画した(現在は不使用)。度重なる増改築のため竣工当時の姿はわずかに残るばかりだが、増築の際に取り壊した玄関前の大きな庇の跡や、木板の型枠跡がついた外壁コンクリートなどがいまでも残る

26

棟梁堀江佐吉翁記念碑

建立 | 1908年
弘前市銅屋町63 (金剛山 最勝院境内)

▶p.09参照

28

旧藤田家住宅 (太宰治まびの家)

設計 | 不詳 移築 | 1921年 再建 | 2006年
弘前市御幸町9-35
太宰治(津島修治)が官立弘前高等学校へ通うために下宿していた住宅。藤田家は津島家の親戚筋にあたり、修治が暮らした緑側と出窓がついた6畳間には、机などの家具がそのまま残り公開されている。建物は、大正期に登場した中廊下型平面で構成。新しい建材を使わず旧礎々関村長宅を移築したものと伝えられている。建物は、当初の場所から約100メートル南東に建物の向きもそのまま移築し、公開されている。市指定有形文化財



▶p.08、13参照

23

日本聖公会 弘前昇天教会

設計 | ジェームズ・M・ガーディナー 竣工 | 1920年
弘前市山道町7
愛知県の博物館明治村にある「聖ヨハネ教会堂」(1907)と同じく、アメリカ人宣教師で建築家のガーディナーの設計。煉瓦造平屋建てで、全体はゴシック様式にまとめられており、イギリス積みの赤煉瓦、正面右寄りに立つ三角塔の鐘は、このあたり一帯のランドマークとなっている。「弘前れんが倉庫美術館」からもほど近い。弘前における煉瓦造建築のひとつとしてぜひめぐりたい。青森県重宝 ※現在、外観のみ見学可能



▶p.09参照



27

旧青森県尋常中学校本館 (現・鏡ヶ丘記念館)

設計 | 川元重次郎 竣工 | 1894年
移築 | 1958年 改修 | 1992年
弘前市新寺町1-1



1894年に落成した旧青森県尋常中学校本館の一部を移築・修復した建物。明治中期の学校建築が体験できる。1958年の新校舎完成を機に取り壊す予定だったが、卒業生らの願いを受けて本館中央部のみ移築し、記念館として保存。その後、台風被害にあっても、創立110年記念事業の主要事業と位置づけ、創建当時の姿に近づけるべく改修工事を行いいまに至る。台風被害の際の生々しい写真が展示されているが、それでも残すこと決めた関係者の建物に対する想いが伝わってくる。青森県重宝



30

弘前学院外人宣教師館

設計 | 桜庭駒五郎 竣工 | 1906年
移築・復元 | 1979年
弘前市稔町13-1



弘前教会内に開設された女学校に始まり、弘前女学校を母体とする弘前学院。外人宣教師館は同校に派遣された米国婦人宣教師の宿舎として建設され、当初は市街地中央にあったが校舎の移転とともに、現在地に移築・復元。資料館として活用されている。八角形の尖塔、下見板張りペンキ塗りの外壁、窓の鍍戸、飾り破風付きの張出しを設けるなど整った意匠をもつ。設計施工は弘前のクリスチャン棟梁・桜庭駒五郎と伝えられる。国指定重要文化財